

書 評

『保険業界戦後70年史』

九條 守 著

題名が示すとおり、日  
本の保険業界が戦後70年  
間にたどってきた歩み  
を、ベテラン業界人の目  
線でまとめたものであ  
る。

日々の業務に追われる  
多忙な保険会社・保険代  
理店の皆さんは、保険業



界が歩んできた歴史を振  
り返ることになかなか積  
極的な意味を見いだせな  
いかもしれない。著者の  
九條氏も「あとがき」の  
中で、ある保険代理店の  
方から「損保の歴史を振  
り返っても、今の仕事に  
ほとんど役に立たない」

「昔はそんな  
ことがあった  
のか」と驚い  
たりするだけでは、歴史  
研究は単なる娯楽で終わ  
ってしまう。しかし、本  
書を読めば、例えば、保  
険募集人に対する規制を  
導入した2014年の保

【評者】

植村

信保

(キャピタスコンサルティング 保険アナリスト)

販売現場の歴史の記述が充実

流通に関わる多くの業界  
人が日常的に直面する諸  
制度が、保険流通のいわ  
ば普遍的な「あるべき  
姿」を想定し、それを実  
現するための仕組みとし

るよう見える。  
さらに私は、歴史を学  
ぶもう一つの意味とし  
て、過去の経緯を知るだ  
けでなく、数十年単位の  
長いスパンでなければ見

て導入されたのではな  
く、過去の経緯やその時  
その時代の背景の影響  
を受けながら形づくられ  
てきたことが分かるだろ  
う。あるいは、たまたま  
発覚した小さな問題が、  
その後業界を揺るがす大  
事件に発展するようにな  
るともある。3メガ損保グ  
ループの誕生にしても、  
そこには「偶然」「たま  
たま」が強く作用してい

えてこないものがあると  
考えている。本書は戦後  
70年を、戦争直後からの  
50年間を「成長の時  
代」、バブル崩壊後から  
現在に至るまでの20年間  
を「激動の時代」として  
捉えている。ただし、本  
書でも触れられているよ  
うに、「成長の時代」の  
前には激しい競争と秩序  
を求める動きのぶつかり  
合う時代があり、その

業を切り開いていく普通  
の時代に戻ったと言っ  
きかもしれない。  
異論はあるかもしれない  
いが、私は客観的な歴史  
なるものは存在しないと  
考えている。同じ歴史的  
事象を取り扱っている  
も、記述する人によって  
見方が大きく異なること  
はよくある話だ。例え  
ば、私が中学生の時に習  
った歴史では、江戸時代  
の田沼意次と  
いえば、享保  
の改革を断行  
した徳川吉宗

のかといった、「激動の  
時代」における販売チャ  
ネルや募集コンプライア  
ンスに関する記述は非常  
に充実しており、販売現  
場に携わる業界人には読  
みやすいだろう。

最後に、蛇足ながら  
点だけ指摘させていた  
だきたい。第2章第4節  
では生保破綻を取り上げ  
ていて、そこに「保険料  
等収支状況(保険料等収  
入から保険金等支払金を  
差し引いた金額)を見る  
と、大半の会社はマイナ  
スであり、『逆ザヤ』状  
態だった」とあり、プラ  
スだった5社が生き残っ  
たという記述がある(1  
60頁)。保険収支のマ  
イナス、すなわち全体と  
して資金流出が続くのは  
経営としてあまり望まし  
い話ではないが、保険会

社は保険金等の支払いに  
備え、責任準備金を確保  
しているの、保険収支  
のマイナスは経営の健全  
性とは関係がなく、まし  
て「逆ザヤ」を示すもの  
でもない。20年前の生保  
危機の時代、保険評論家  
による同様の言説をしば  
しば見かけたことを思い  
出しつつ、あえてコメン  
トさせていたのだが、  
もちろん、保険流通に近  
い著者による戦後70年史  
という本書の価値を揺る  
がすような話ではない。  
巻末の年表も読者には有  
益だろう。  
(A5判/368頁、  
保険毎日新聞社刊、18年  
7月発行、本体価格30  
00円+税)

後、戦時体制による統  
制、終戦直後の壊滅的な  
状況を経て、「成長の時  
代」に至っている。戦後  
50年間続いた「成長の時  
代」とは、復興期はとも  
かく、人口増加や東西冷  
戦、高度経済成長といっ  
た外部環境に恵まれ、緩  
やかな競争環境を人為的  
に確保することが可能だ  
った極めて特殊な時代だ  
ったと言える。本書の  
記述からも、極論すれば  
この時代の業界の歴史と  
は、規制や制度の歴史だ  
った感がある。こうした  
恵まれた外部環境はすで  
に1980年代後半には  
消滅しつつあったため、  
日米保険協議に象徴され  
る外圧がなくても、遅か  
れ早かれ「成長の時代」  
は終わっていたと考えら  
れる。今後は人口減少と  
いう未体験の事象を無視  
できないといえ、長い  
スパンで見れば、経営者  
が自らの知恵と決断で事

対し、ワイロを受け取  
る悪徳役人という評価が  
中心だった。しかし、農  
業(コメ)中心の経済が  
徐々に行き詰まる中で、  
商業を重視した先進的な  
経済政策をとった田沼政  
治を高く評価することも  
できるだろう。どのよう  
なバックグラウンドを持  
つ人が書くかによって、  
歴史の記述は変わって  
くる。

巻末の略歴によると、  
著者の九條氏は大手損害  
保険会社を退職した後、  
保険代理店の指導・教育  
に携わったとある。その  
ようなバックグラウンド  
が影響しているのか、業  
界再編や経営破綻などの  
記述は事実を中心に淡々  
と書いてある印象なのだ  
が、例えば「成長の時  
代」における商品開発競  
争がどのようなものであ  
ったか、あるいは、なぜ  
保険会社だけでなく保険  
募集人にも規制が入った

「成長の時代」のマイ  
ドをいつまでも引きずっ  
ていては、もはや生き残  
りにはあり得ないと思わ  
ず考えてしまった。

最後に、蛇足ながら  
点だけ指摘させていた  
だきたい。第2章第4節  
では生保破綻を取り上げ  
ていて、そこに「保険料  
等収支状況(保険料等収  
入から保険金等支払金を  
差し引いた金額)を見る  
と、大半の会社はマイナ  
スであり、『逆ザヤ』状  
態だった」とあり、プラ  
スだった5社が生き残っ  
たという記述がある(1  
60頁)。保険収支のマ  
イナス、すなわち全体と  
して資金流出が続くのは  
経営としてあまり望まし  
い話ではないが、保険会